

第70回日本臨床眼科学会 モーニングセミナー 8

日時：2016年11月5日（土） 7:45~8:45
会場：第2会場(国立京都国際会館 1F アネックスホール1)

OCT Angiographyは 眼科臨床を **変えるか？**



座長 **石橋 達朗** 先生
(九州大学)



演者1
坂本 泰二 先生
(鹿児島大学)



演者 2
飯田 知弘 先生
(東京女子医科大学)



演者 3
小椋 祐一郎 先生
(名古屋市立大学)

座長のことば

OCTが眼科の臨床で使用されるようになって約20年になるが、この間に眼科でこれほどまでに急速に発展し、普及した器械は未だ類をみない。最初のOCTは、生体下で非侵襲的に網膜断面画像が得られること、そのものが画期的だった。その後SD-OCTの登場で画像取得の高速化・高解像度の網膜三次元情報が得られるまでになった。参入会社も増加し、各社しのぎを削って解像度の更なる向上・発展性に取り組んできた。そして登場したのがOCT Angiographyである。これまで網脈絡膜の血管・血流を観察するには蛍光眼底造影撮影を余儀なくされていたが、副作用のリスクや禁忌疾患を考慮せざるを得なく、また、1回の撮影で時間がかかることから頻回の検査は不可能だった。一方、OCT Angiographyは、OCTの信号で血管情報を可視化するため、非侵襲的に比較的瞬時に血管情報が得られることが最大の利点である。また、3次元の血管情報が得られるため、FAでは不可能な層別ごとの解析も可能である。血管外漏出などが検出できないといった欠点はあるものの、近い将来臨床に不可欠な技術となり得る可能性は高い。本セミナーでは、実際の臨床現場でのOCT Angiographyの評価・可能性を3人の先生方にお話しいただく。